INFORMATION

お骨の行方

寺子屋トーク

～「人生の店じまい」を考える。

第30回の寺子屋トークは、コモンズフェスタ2001記念トークセッションして開催します。

いま死にゆく人を取り巻く環境が大きな転換期を迎えています。家族の多様化とともに、お墓の承継難が訪れ、葬送の自由化も急速に進んでいます。同時に、よりよい葬送を目指す人々が現れ、それをサポートするNPOや僧侶たちも登場しています。

人生の店じまい」とは、超高齢社会の大問題。お墓の現在を通して、あなたらしいエンディングについて、現代にふさわしい葬送のあり方を提案するノンフィクション作家・井上治代さんと、宗派を問わない永代供養墓の「安穏廟」を建立した日蓮宗妙光寺住職・小川英爾さんと考えます。シリーズ日本人の死に方PART3!

◆　◆

○ゲスト／井上治代さん（ノンフィクション作家）
　小川英爾さん（日蓮宗妙光寺住職）
○日　時／11月11日（日）14時00分開始（16時30分終了予定）
○会　費／会員1000円（一般1500円）

いのちと出会う会

生きること、老いること、病すること、そして死についてじっくり仲間と語り合う、そんな集いが「いのちと出会う会」です。

毎月第3木曜に開催しています。どなたでも参加できます。ぜひあなたもいらしてください。

第14回　11月15日（木）
「オキナワ　捕虜収容所秘話」

話題提供者
写真家・スタジオ経営　渡辺憲央さん

本土決戦地となった沖縄戦。その捕虜収容所で、戦争の悲劇を撮り続けた日本人カメラマンがいました。

戦争と平和、生と死、熾烈を極めた地上戦のすべてを、シャッターが記憶しました。現在87歳となった沖縄戦の生き証人が、いま若い世代に語り継ぐ戦争秘話。

◆　◆

◎時　間：午後6時30分～
◎参加費：500円
◎会　場：應典院
お申し込みは事務局まで。

1年の活動の集大成、應典院年間報告書完成!!

今号のサリュの中に「應典院Year Book2000」を同封いたしました。これは、寺町倶楽部の事業のみならず、應典院で行われた活動のすべてを網羅したもので、毎年秋に発刊しています。

活動の全体をご確認いただくとともに、ご知己の方に應典院、寺町倶楽部の活動をお伝えいただくのに、ぜひご活用ください。

【新入会員ご紹介】

（2001年10月15日まで）

前号発行以降にご入会いただいた方々です。ありがとうございました。

○一般会員
【大阪府】
　西田　逸夫　大阪市淀川区
【奈良県】
　大橋　正和　生駒市
○個人会員
【群馬県】
　黒川　和則　前橋市
○学生会員
【大阪府】
　富　　優子　大阪市都島区
○法人会員
【香川県】
　法然寺　高松市

サリュ　VOL. 28
應典院寺町倶楽部のニューズレター

発行日　2001年10月18日
（偶数月発行）
編集人　池野亮、大塚郁子
川井田祥子
発行所　應典院寺町倶楽部
〒543－0076
大阪市天王寺区下寺町1－1－27
TEL06－6771－7641
FAX06－6770－3147

應典院寺町倶楽部のニューズレター

Salut

［サリュ］
フランス語で救いの意

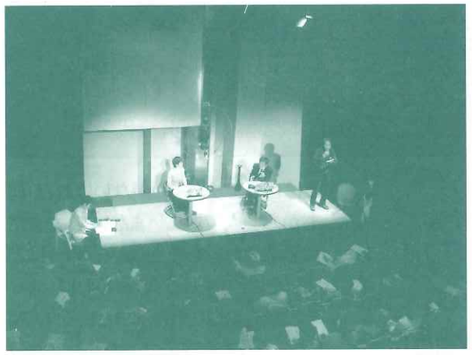
2001 OCTOBER
vol.28



思い出の一曲をリクエストする番組がある。歌の内容はもとより、聞いていたときの状況、時代背景や心の状態を懐古するためにその一曲は選ばれるようだ。大きな喜び、楽しみ、受験や恋愛、出会いや別れ……。時を経て聴きなおす曲にはなつかしさがあふれ、一人ひとりが確かにその時代を生きたという生の感触があるのかもしれない。あなたの思い出の一曲は何ですか？

「吃音は治る」という当時の常識に疑問をもった伊藤さんはその後、同じ悩みをもった仲間とともに“セルフヘルプ・グループ”を立ち上げます。そして、海外からいろんな文献を取り寄せるなど、自分たちの手で情報を集めた結果、「吃音が完全に治る可能性は低い」という現実を知ることになります。しかし、そのことで落ち込んだわけではありません。治らない、治りにくいとわかっても仲間がいる。同じ悩みを抱えた仲間の存在によって、どれだけ安らぎを感じ、孤独から救われたことか。

「私は独りぼっちではない」「私は私のままでいい」「私には力がある」と実感した伊藤さんはそこから精力的に活動を展開し、「どもってもいい」ということが一つの選択肢となるような情



報発信を続けています。「一部の専門家からは危険思想だと言われるんですよ」と苦笑しながらおっしゃる伊藤さんは、本人や親、臨床家たちと手を携え、「我々はどもる言語を話す少数者である」というメッセージを発することによって“普通とは何か”を問いかけているのです。そしてそのことは吃音者だけでなく、私たち一人ひとりが生きやすくなる社会を作っていくことにつながっているのではないでしょうか。

相手の立場に立たないで

COMLの相談スタッフは、いわゆる医療の専門家ではありません。辻本さんは「専門家でないからこそ、たった一つのできることがあるんです」と言います。つまり、専門的知識をもてばもつほど「こうすればいい」と教えたくなったり、あるいは「その判断はまちがっている」と評価したくなったりして、相談者の話を「あるがままに聴くこと」ができなくなります。医療の専門家ではないけれど相談のプロとしてできること、それは「あるがままを聴いて、問題点の整理ができるよう一緒に考えること」です。

そして、「以前はよく『相手の立場に立って』と言っていましたが、それは傲慢だと気づかされた、一人の少女との出会いがありました」と、こんなエピソードを語ってくれました。

白血病という持ち物をもった少女とある程度親しくなった頃、思いきって彼女に「あなたが病気になっていちばん辛いことは?」と質問してみました。すると「わかったような振りをして、やさしくされるとき腹が立つ」という返事。スポーツ万能だった彼女は、突然病気の持ち主に。そして、街で偶然友人を見かけますが、何も声をかけられず、隠れるようにして近くの店へ駆け込んだそうです。「そのときの私の気持ちがわかる? 私は365日、1日24時間、ずっと病気から離れられないんだよ。みんな、何がわかるって言うのよ!」。さらに「いちばん望んでいることは?」ときくと、「最後まで話を聴いてくれる人がほしい」。

“聴く”という行為は相手の感情の揺れが伝わって、ややもすると聴いているこちらの感情まで揺れてしまいます。そうなると、わかったつもりになりやすく、全体を見失って冷静な判断ができないばかりか、同情から逆に相手を傷つけてしまう場合もあるでしょう。「相談のプロは感情移入しないことが大切。言い換えればそれは、相手の立場に立たないことなのです。人の為と書いて“偽(り)”と読むでしょう?」と辻本さん。

相手の話を聴く。言葉を受けとめる。自分自身、日常の中でどれだけできているのか改めて考える必要があると感



じました。

「何もできない」ところからのスタート

伊藤さんは「どもってもいい」と世間ではまだまだ少数意見の主張をもっているがゆえに、ついつい一所懸命になってしまって、気をつけないと相談者にこちらの意見を押しつけてしまう危険性があるんです」と言います。

「一口に“吃音”と言っても、一人ひとり程度が違うし、生活環境や生い立ちも違います。だから『この人は大丈夫だ』と相談を受けている側が勝手に決めることはできません。できるのは、吃音を完全に治せる可能性は低いという事実を伝え、その人がその人らしく生きていくにはどうしたらいいかを一緒に考えることぐらいです。そして、いつも付け加えるのは『夢は捨てないで』ということ。『吃音だから〜できない』ではなく、吃音のままでも自分らしい人生を送ることはできるはず。私自身が仲間と出会い、とても大きなエネルギーをもらっています。だから、相談で問題が解決できなくても、『家族以外にあなたのことを考えている人がいるよ』ということを少しでも伝えられればと思っています」。

最近の新しい動きとして“言語聴覚士”が国家資格になるなど、言葉に関わる専門家は今後も増えていくでしょう。伊藤さんは専門家に対して「何もできない、というところから出発してほしい。そこからやるべきこと、できることはたくさんあるはずだ」とおっしゃいます。第1部でも鎌田さんが「病院では『することがなくなった』という医者がいます。治療することがなくなったから退院してくれという意味なんですね。治すことを目標に、医者が患者を

治療するという視点で考えれば確かにそうかも知れません。でも、医療には本来“支える”という意味があって、科学的な治療はできなくても、そのときにこそできることはたくさんあるのです」と話されました。

専門家でもできないことはある、いのちは科学でわりきれない、という視点に立って謙虚に接することで、相手に寄り添いながら、いま求められていることが自然に見えてくるのかも知れません。

「運に任せる」と決めることも“自己決定”!?

専門家の役割について辻本さんは「確かな技術と情報の提供、患者の知りたいことに対応できるコミュニケーション能力が必要でしょう。とくに悪い知らせをする場合には、愛と勇気と知性、誠意をもって接してほしいですね」。伊藤さんも「エネルギーがわいてくるような情報提供をお願いしたい」と言います。

さらに伊藤さんは「吃音にかぎらず、いままでは当事者の声がないがしろにされていました。セルフヘルプ・グループの活動は活発になっていますが、まだまだでしょう。当事者の声をまとめてもっともっと発信するとともに、偏りのない情報をみんなが共有できるようにする努力が必要です。そのためには教育の見直しも必要でしょうし、専門家の協力も不可欠です。当事者性と専門性の二つがあってはじめて、一人ひとりの自己決定が保障されていくのではないでしょうか」。

第2部の最後で参加者に発言していただきました。その中のお一人の意見、「私はどうしても自分で決められないとき、コインをはじいて決めるんです。裏か表、どちらか出た方でね。運に任せるというか、ジタバタ考えてもしゃあないなあ思うて」。



イタタタ、さすが人生の先輩、達観されているというか、う〜ん参りました。「自己決定=自分で決めること」という前提に立ってしまって、大切なことを見落としていたような気がします。「自分で決めない、任せる」と本人が決めたのなら、それも尊重されるべきこと。「(自分の頭で考えて)決める=善」という前提に立ってしまうと、「一人ひとりに寄り添う」なんてことはできなくなるでしょう。最後の最後で大きな落とし穴に気づかされたような、そんな寺子屋トークでした。

◆参加者のアンケートより◆

(回答101名)

【第1部の感想】

○これからの医療のあり方について考えさせられました。専門家と患者が人と人とのつながりで結ばれる時代になればいいですね。(22歳、学生)

○いのちに関わる話であり、ついつい忘れてしまう大切なことを思い出させてもらった。(46歳、会社員)

○看護に携わる者として、「看護とは」「こんな看護婦になりたい」と考えていたことをもう一度考えさせられました。(45歳、看護婦)

○打つ手がなく、投げ出されてしまった患者の家族として、鎌田さんのような医師がいらっしゃることは救いです。今後の医療に期待するとともに、患者側、受け手の意識も大きく変わらねばならないと思います。

○人として、患者として「生きる力と意志」を、また一つもらったように思います。がんばらない、無理をしない、でも、あきらめない、逃げない、こびない。(38歳、無職)

○先生と諏訪中央病院のしてこられたことは、「公立病院だからこそ、できることはまだまだある」ということを示していると思います。私たち市民にもできることがあるはずですね。(38歳、ダンス教師)

○鎌田さんの著書もあまり知らなかったのですが、自分の今後の生き方や年老いていく両親のことなどを考えながら、お話を聞くことができ、とてもよかったと思いました。自分の視野や思い(世界観)が広がったことが、今回のいちばんの収穫です。

○ケアワーカーとして日々、お年寄りと接する中で、その人らしい生活が最後までできるようにと、努力しています。悩みながらの毎日です。とても大切な心を学ばせていただいた気がします。(44歳、ケアワーカー)

○生活を視野に入れ、いのちを支える。自然治癒力を生かし後ろから支える医療。言葉を受けとめるということが印象的でした。(44歳、介護支援専門員)

【第2部の感想】

○初めて聞く内容でした。目の前が広がりました。(45歳)

○両氏の実際の具体的な現場での話が良かった。ふだん、何不自由なく生活している中でも自己決定を迫られる場面が多くありますが、これは本当にむずかしいことで、つい逃げてしまうこともあります。考えさせられました。(37歳、製造業)

○「患者の立場に立つことはできない」、すごく印象的でした。自分が思いこみでわかったふりをすることほど、相手を苛立たせることはない。思い当たることが多々あります。自分を切り替えるよい機会になりました。(23歳、営業)

○最後まで話を聞くこと、確かな技術と個別性、情報提供の仕方など、たいへん参考になりました。(44歳、医師)

○専門職として働くプライドなど、そういうものが「私自身、がんばって生きている」という支えで生きていたような気がします。ある意味、軽いショックを受けています。看護職とかどうとかいうのではなく、一人の人間として相手と向き合い、そのとき一瞬だけでも「あなたに会えてよかった」と言ってもらえるように、つねに祈っていきたいと思います。(43歳、看護婦)

○自分の経験を語るのが、いちばん心に響いてきますね。私も自分の言葉をもちたい! 参加者の難聴の方の話も聞けてよかったです。今日の話の視点をもって、自分に何ができるかを考えたいです。(23歳、学生)

○いままで当たり前のように使ってもきたし、指導もしてきた「相手の立場に立って」の奥深さを改めて知らされた思いがする。時間のとれないスピード時代に、どれだけ真剣に向き合えるかという疑問をもち、また考える機会を与えられたことに感謝。(51歳、公務員)

コモンズフェスタ2001 ART OF LIFE ～「生き方」新・呼吸～ いよいよ11月4日からスタート!!

コモンズフェスタの開催がいよいよ迫ってきました。

ここでは、中でも寺町倶楽部主催の催しをご紹介します。

※詳細については、同封の総合パンフレットをご覧ください。

【オープニングイベント】

Part1 パフォーマンス「ハシゴのうえで。詩人とダンサーは出逢う。」&アーツトーク
Part2 コモンズ2001参加団体によるプレゼンテーション
Part3 オープニングパーティー
11月4日(日)　13:00スタート　参加費500円

【Art Collaboration Project】

My object, I and object――私のモノ、私とモノ
11月4日(日)～11日(日)　入場無料
※アーティスト・トーク(9日)、ギャラリー・ツアー(連日)もあり。

応典院ダンス参観日
11月10日(土)13:00～15:00
参加費:1500円(大人)300 円(子ども)

【未来のコモンズ人育成プログラム=大学の公開ゼミ】

中村正助教授ゼミ((財)大学コンソーシアム京都、NPO論)
11月10日(土)14:00～16:00
無料(要電話予約)

小暮宣雄助教授ゼミ(京都橘女子大学、文化政策論)
11月10日(土)15:30～17:00
無料(要電話予約)

Make up Community
コミュニティな人々

ゲスト:しばたゆりさん

一人ひとりが自分を見つめ直す、そんな場を提供できれば……という思いから、今年のコモンズフェスタでは「アーツコラボレーション企画」を新設しました。その中の一つ、「My object, I and object～私のモノ、私とモノ」は、一般の方々との協働作業で作品を作っていきます。その背景にあるものとは何か、アーティストのしばたさんに伺いました。



子どもの頃はついていけない勉強より、どちらかというと自由にさせてくれる美術の時間が好きでした。できれば美術の世界に入りたいと考え、なんとか芸大に進み思いをかなえたんですが、自分に自信がもてず深く落ち込んだ学生生活でした。

そんな自由にさせてくれるはずの絵を描いているとき、絵の具と紙を使って画材屋で買ってきたものを廃棄物にしているような罪悪感を覚えていました。何か自分の感覚にそぐわない物理的な力に押しつぶされそうになっていました。自信のもてない自分とその感覚とでとことん落ち込み、自分の肉体さえもうとましく感じたとき、「私はどうしてここにいるのだろう?」「たとえば髪は自分の体の一部だけど、切ってしまえばモノになる。肉体だって死んでしまえば灰になる。どこからどこまでが私なの?」と疑問は悩みを深めていきました。そのように私はあらゆるモノとの関係、"自と他"の関係を見つめ直すようになりました。

私の他の作品で「ダスト・プリンツ」という埃の粉で絵の具を創り、版画に仕上げたものがあります。ある一定の場所で集めた埃は、そこに集まった人々の痕跡が残っていて、たとえばそれは、地層を調べればそれぞれの時代の人々の生活ぶりがわかるのと同じです。私は平家物語の序文の「風の前の塵に同じ」という言葉が大好きで、塵のような粒子にすごく惹かれるんですね。形あるモノは必ず壊れてしまいますが、粒子の一つ一つにも込められた思いや記憶は残るはずです。そんな粒子が積み重なり地層を作っていくことに、私はとても豊かな美を感じます。今回のプロジェクトで、撮った写真の表面をサンドペーパーで削り取り粒子にしてしまうのも、そんな思いがあるからです。

「手の上に置くモノが決められない」という人もいますが、思いを巡らしているときからプロジェクトに参加してくださっていると思います。たとえ決められなくても、そんな時間をもってくださったこと自体、ステキだなと思います。ですから携えてきてくれたモノ語りや、撮影させてもらった写真は、今度は私の"大切なモノ"になっていきます。

また、展示された写真を見る人が何を感じるか……応典院だからこそ膨らむイメージもあるでしょう。そんな"モノ語り"に、どうぞ参加してください。

秋田住職発 応典院掲示板

衝撃的なテロが発端となって、とうとう戦争が始まってしまいました。どうにもやりきれない気持ちで一杯です。

かつてのイデオロギーの対立には明確な論点がありましたが、テロには複雑な要素がからみあい、言い分もそれぞれであれば、一方的に決め付けることがむずかしい。アメリカは正義の旗を掲げますが、本当のところ、世界中の多くが問題の根の深さに心底弱り果てているのではないでしょうか。

まして宗教の問題がからまってくると、余計に問題はややこしくなる。イスラム原理主義が全部テロリストであるはずがないのですが、米国流近代主義のわかりやすさを物差しにすれば、わけのわからないものはすべて敵なのです。敵か味方か、という単純な二項主義が、世界中から中間的な価値を抜き取っていきます。すべての宗教にとって、異教徒こそ愛されなくてはならないのに。

もちろんテロは許すことはできません。しかし、寛容の時代、対話の時代と逆行するような世界の情勢に、仏教の共生の本当の意味が、いま問われているように思えてなりません。

■がんとともに生きるフォーラム

去る9月28日、応典院の協力事業「がんとともに生きるフォーラム～身体と表現」(主催・芸術とヘルスケア協会)が開催、ほぼ満堂の100名の参加者がありました。

がん克服落語会を全国で開催している笑福亭小松さんの講演の後、協会の代表である播磨靖夫さんの司会で、産婦人科医の加藤治子さん、当事者である小園優子さんと私もいっしょに、「いのちの痛みを分かちあう文化」について語りあいました。

病気、あるいは高齢、障害など、当事者であるないかかわらず、すべての人にとっての、いのちの本質について考える、深い試みとなりました。



この後も、当事者のみなさんと、ゴスペルやダンス、朗読などのアーツ・プログラムも随時開催されます。

■アーツ・マネジメントの講座終了

大阪市立青年センターに主催の「めざせ、市民プロデューサー!　アートマネジメント・セミナー」(応典院協力)が9月期に全5回のプログラムを開催、9月18日には受講生約30名が応典院に会場を移し、アートと社会を結ぶアートセンターの役割について話し合いました。コーディネーターは京都橘女子大の小暮宣雄さん。

演劇スタッフやインターン倶楽部の運営委員や外部ブレーンなど、さまざまな立場から応典院のアーツ・プログラムにかかわる顔ぶれが登壇して、現在かかわるプロジェクトについて報告しました。人材の生の声を聞いて参加者も満足そうでした。

■NHKテレビで「元気?」

お盆直後の8月17日、NHKの「かんさい元気宣言」で応典院が紹介、私が衣姿で「元気?」と呼びかける趣向のものでした。わずか30秒のスポットながら、朝の連続テレビドラマに時間帯とあって、たくさんの方々に視聴していただきました。ありがとうございました。

■アートと社会の関係を問う

最近アーツづいていますが、今度は大阪市立弁天町市民学習センターの「アートの力～芸術は社会にとって必要か」に出講します。これは、医療や福祉、まちづくりなどアーツをキーワードに解き直し、現代社会におけるアーツの役割を考えるもの。11月8日の播磨靖夫さんをトップに、アート・ディレクターの原久子さん、京都造形芸術大の小林昌廣さんらがそれぞれセミナーを受け持ちます。

私は11月29日「アートなお寺」と題して、お話します。

問い合わせ06－6577－1430。

■現代教化ファイル「お墓特集」刊行

応典院に事務局を構える教化情報センター21の会では、研究誌「現代教化ファイル」第7号を刊行、今回は「お墓の未来形」の特集で、墓や葬式の変化を検証しながら、現在の制度の矛盾とこれからの展望を見つめなおします。B5版96頁。2500円。

お墓が結ぶネットワークづくり

去る8月12日、新潟県の日蓮宗妙光寺で第12回安穏フェスティバルが開催、シンポジウム「寺は人の生死をどう受け止めるか」のゲストの一人として参加してきました。妙光寺は、承継を必要としない永代供養墓「安穏廟」で知られる東北の名刹。お墓を縁に全国から200名以上の参加者でにぎわいました。

シンポは、NHK解説委員の村田幸子さんやノンフィクション作家の井上治代さんらと、全国で先駆的な活動を続ける元気な住職方が登壇、また翌日には永代供養墓のあり方など、新しい葬送について僧侶や市民、業者も混じって、ネットワーク会議が持たれました。

妙光寺住職の小川英爾さんは、11月の寺子屋トークに出演いただきます。

